

表象文化論学会 第6回研究発表集会

『来たるべき啓蒙のヴィジョン
——大橋完太郎『ディドロの唯物論』を読む』

2011/11/12、東京大学駒場キャンパス

『ディドロの唯物論——群れと変容の哲学』、法政大学出版局、2010年

構成

第1部：弁証法の手前側

——ヘーゲルによる『ラモアの甥』読解に関する考察

第2部：抽象と形象

第3部：表象と実在

第4部：化学的思考と物質論

——『自然の解釈に関する思索』から『物質と運動に関する哲学的原理』まで

第5部：一般性と怪物性——反＝理性の自然史

補論：十八世紀自然史概念における一般性の領域

——ビュフォン『一般的個別的博物誌』より

本書の分析した問題

1. デイドロの正体を探る——それは「哲学者」か「文学者」か？

- 「哲学／文学」を区分する学的区別の（とりわけ十八世紀における）不毛さ
- 十八世紀のフランス語”philosophe”のコノテーション
- 「啓蒙」の射程は、哲学・思想の範疇ですべて了解されうるのか？
- 了解されないとするならば、そのとき「啓蒙」とは何になるのか？

2. デイドロの発想の根底にある「図式」を探る

- それを「群れを作り、変容を促す技術」と呼べるのではないか？
- その形成には化学や博物学の影響があったのではないか？
- 万物の存在論的地平もそれによって規定されているのではないか？
 - 存在（論）的怪物性 *monstruosité ontique*
 - 存在の「本来性のなさ」 *ontologique*は*ontique*から派生する

本書の分析した問題（2）

3. デイドロの「哲学的」な受容はいかなるものであったか？

- 『ラモーの甥』はヘーゲル『精神現象学』にとって特別な書であった
- 〈ゲーテ～ヘーゲル〉の流れで決定されたデイドロの価値＝萌芽状態の弁証法
→ エンゲルスによる「弁証法の萌芽」としての高い評価
- ただし、この「弁証法」はデイドロの思考を十全に反映していたのか？
- ヘーゲルによる抽象化を経由したデイドロの思考はその本質を欠いている？
- 唯物論的な意味での「身体」という位相に注目すべきではないか？
- 「身体」という審級の絶えざる媒介のなかにデイドロの思想の核はある？
Ex. 「俳優」「絵画内逍遥」
- ただしこの身体は「群れと変容」の原理に基づく離散的なものだ
→ 「怪物性」への原理的希求がここから要請される

本書から提起される問題

1. デイドロの「政治思想」の可能性

- 集合的な反応を起爆剤にする集団的変容は「力の溢出」としての暴力革命を肯定するものだろうか？
 - 『セネカ論』を参照する必要があるだろう
- かりに帰結としてのデイドロの政治思想がそのようなものであったならば、その地平となる存在論的な怪物性を肯定することは可能か？

2. ラディカルなスピノザ主義としての十八世紀唯物論

- ジョナサン・イスラエルの*Radical Enlightenment* (2001)などを援用しつつ、デイドロの思想をスピノザ主義の変奏として捉えることが必要となる
- そのとき、スピノザが『神学政治論』でおこなっていた議論の反映を、たとえばデイドロのヒエログリフ論などに見ることはできるか？
- 存在するものと、エクリチュール、フィギュールとの関係のなかで、看過されてきた問題系がここにあるのではないか？（『グラマトロジー』批判）

本書から提起される問題（2）

3. 「来たるべき啓蒙」とは何なのか、それは可能か？

→たとえばデリダ『ならず者たち』から

「... 理性の名において国民国家的な主権の論理を改めて問題とし、これを制限しなければならない。おそらくは、主権の不可分性という原理ともども、例外を求めるその権利にも、法=権利を宙吊りにするその権利にも、否定しがたいその存在-神論にも着手せねばならない。実際、民主的と呼ばれる体制においてさえ、主権の根底には存在-神論がある。たとえボダン、ホッブズ、ルソーなどを研究している専門家が、私の見るところでは十分に異論の余地のある議論でもってこれを否定しようとも。

主権の存在-神論と言うとき、そこで神の名のもとに、それも唯一神の名のもとに指し示されているのは、分割されえぬ至高の全能という規定にほかならない。」（p.299）

デリダが提起しているのは、主権＝至高性の機能が完全には抹消しえない現状のなかで、「規則による規定的な知なしに自らを方向づける」ことを可能にするような「責任＝応答可能性」のあり方。

本書から提起される問題（2）

3. 「来たるべき啓蒙」とは何なのか、それは可能か？

→たとえばホルクハイマー&アドルノ『啓蒙の弁証法』から

「...さらに啓蒙は、一般概念の権威のうちに、デーモンに対する恐怖、その模像をつくることによって、呪術的儀礼において人間たちが自然を左右しようとした、あのデーモンに対する恐怖が読み取れると考える。今後物質は、最終的には、優越した内在的力や隠された属性と言った幻想なしに支配されなければならない。」(p.7)

ここでA&Hが言う「啓蒙」とは、ベーコンに立脚した科学主義の影響のなかにある進歩主義的な思想のことを意味している

この見取り図に従えば、確かに、「啓蒙」＝「神話の犠牲」という定式は成立する。だが、そうであるならば、啓蒙的科学性に関する彼らの理解はいささか単純ではないか？

本書で提示したように、デイドロの思想はこうした定向的な科学主義に対してむしろ異を唱えている。（本書第三・四部）

→成長は線的というよりは多形平面的であり、進歩の可能性のイメージも乗り越え型というよりは偶然的刺激に対する反応モデルに準拠している。

（“polype”モデル）

本書から提起される問題（2）

3. 「来たるべき啓蒙」とは何なのか、それは可能か？

→たとえばアドルノ「文化批判と社会」（『プリズメン』）から

「... 社会がより全体的になれば、それに応じて精神もさらに物象化されてゆき、自力で物象化を振り切ろうとする精神の企ては、ますます逆説的になる。宿命に関する最低の意識でさえ、悪くすると無駄話に墮するおそれがある。文化批判は、文化と野蛮の弁証法の最終段階に直面している。アウシュヴィッツ以後、詩を書くことは野蛮である。」(p.7)

詩を書くことに内在する「野蛮」の可能性をディドロは当時すでに指摘していた。
→ディドロ「詩を書くためには、野蛮さが必要である」

アドルノによる啓蒙批判の核心は結局次のような言明にあるのではないか？

「文化批判者には、生そのものの物象化が啓蒙の過剰ではなくて啓蒙の過小にもとづくことが洞察できない。そして現代の特殊な合理性によって人類に加えられているさまざまな毀損が実は全体的な非合理生の落胤であることも洞察できない。」(p.19)

本書から提起される問題（2）

3. 「来たるべき啓蒙」とは何なのか、それは可能か？

結論：ディドロの思想

存在論的なレベルにおける存在-神論の拒絶＝唯物論的一元論

発生論的視点に基づく「合理性」批判

合理性の本質

→「区別し、秩序づける」能力ではなく、異なる要素を連続させ統合することにある
→ただしこの統一はつねに仮のものであり、それはつねに変わりうる（怪物性）

→ poiesis に固有の運動も、同じひとつの「合理性」としてみなされる
→それは、ある種の発生に則りつつ、別の発生とスムーズに自らを織り重ねる技術
（"absorption and absorbing"）

これらを「非合理」と名付けることなく、そのままに言説化していくディドロ
→その実践としての『百科全書』と「文学的」あるいは「哲学的」「美学的」作品群

本書から提起される問題（2）

3. 「来たるべき啓蒙」とは何なのか、それは可能か？

結論：ディドロの思想 respon-sensibilité 応答感受可能性

「人間／非人間」の転倒：その人間観は、未熟な合理性に基づいた「人間」ではない

合理的なもののオルタナティブをドライブさせたならば、それを備えたヒト的存在は
「非人間」「怪物」と呼ばれるべきものになるだろう

→「超越論的-経験的二重体」という双頭の怪物は、まだあまりにも「人間的」である

「微細なものを徹底的に感知せよ！（ただしそれを知識として合理的に知ることなく）」
la sensibilité pour l'insensible, «je-ne-sais-quoi»の美学→狂気・倒錯と紙一重

多様な刺激に常時反応する自らと、それによって変わりゆく自らそのものを享受する
→多形倒錯的感受性の極みを生き切るための「責任」=俳優術

「人間」は、瞬間的にひとつのまとまりとして見いだされる「人間的なもの」を纏った俳優としてしか存在し得ない。内在する「非人間的」的危なっかしさをポジティブなものへと転化させ、偽-本質的な「非人間」（ex.テクノロジーの暴走）を馴化するための技術へといかに「変容」させるかが、今日問われているのではないか？